

海からの贈り物

鹿児島県立大島北高等学校 二年 福元 彩夏

「またか……」

浜辺に打ち上げられた一匹のウミガメを見て、一人の人魚がつぶやいた。

ここは、奄美大島。うつくしい自然に囲まれた島だ。そんな素敵な場所で、今日もまた一つの命が失われた。このウミガメは人間の捨てたゴミを誤って食べたことにより死んでしまったようだ。

「かわいそうに……。これだから人間はキライだ。」人魚は悲しみと怒りが入り混じった顔で、またぼつりとつぶやいた。

それから数日経ち、人魚はこのまへの浜辺へ向かった。するとそこに、一人の少女が座り込み、何かをしていた。人魚は人の姿に変身すると、少女に近づいて声をかけた。

「人の子、ここで何をしている。」

少女は驚いた様子で顔を上げ、「人の子」という呼び方に違和感を覚えつつも、うつむきながら、つぶやいた。「花を供えていたんです。この前ここでウミガメが動かなくなっていたので……」

人間にもウミガメの死を悲しむヤツがいるのかと人魚は少し驚いた。

「あなたは何をしていたんですか。」

少女は笑顔で尋ねた。

「私もお主と一緒にだ。」

そう言い残して、人魚はその場をあとにした。

次の日もあの場所には、あの少女がいた。人魚の足音に気付くと、少女はぺこりと頭を下げる。人魚は少女の隣に腰を下ろした。

「なあ、人の子。お主はこの島が好きか。」

「はい、大好きです。特に、この海が。」

人魚の目をまっすぐに見つめて、少女は答えた。その答えを聞いて、人魚は嬉しそうに笑った。その日から、二人は毎日この場所で話をした。この島の自然の豊かさや海の美しさについて。

そんなある日、人魚がいつもの場所で海を眺めていると、少女が汗だくになって駆け寄ってきた。

「ついに奄美が世界自然遺産登録されましたよ。」

そのことが書かれた記事を嬉しそうに握りしめている。

「セカイシゼンイサン。何だそれは。」

「ええ。知らないんですか。」

少女は本当に驚いた様子だったが、奄美にたくさん珍しい生き物が生息していることが世界にひょうかされ

たこと、この登録が島の自然を守り伝えていくための大きな一歩となることなどを説明した。

「その世界自然遺産とやらに登録されたことで島は何が変わるのか。」

「そうですね……世界自然遺産登録によって多くの人が奄美を知ることになり、観光客が増えて、どんどん島が賑わいますよね。」

少女は楽しそうに笑顔で答えた。すると、それまで穏やかに話を聞いていた人魚の表情は一変した。

「よそ者が来るだと。ふざけるな。そんなことをすれば、この島の自然が、海が、汚されてしまうではないか。」少女は、必死に弁明しようとするが、人魚の怒りは収まらない。

「この前のウミガメを見ても何も思わなかったのか。ただでさえ、このような現状があるのだ。よそ者がくれば、もっとひどいことになる。」

「それは……でも、決まったことは変えられないんです。私には何もできません……。」

少女は涙をぼろぼろとこぼしながら、力なく答えた。「すまない。いいすぎた。」

人魚ははっと我に返り、謝った。二人の間に沈黙が流れる。落ち着きを取り戻した人魚が少女に尋ねた。

「人の子、年はいくつだ。」

「何ですか急に。」

少女はふてくされそうに言った。何度も何度も促され、やっとのこと、十二さいです、と少女は答えた。

「十二か。人の子、お主は自分には何もできないと言っただな。お主はこの海が大好きだと言っていたが、あれは嘘か。」

「嘘じゃない。」

少女は声を張り上げた。少女を見つめる人魚の目はとても優しくかった。

「それなら、お主がこの海を守れ。」

人魚の言葉に驚いた少女は、何かを言おうとしたが、そのまま口をつぐみ、うつむいてしまった。その様子を見て、人魚は続けた。

「この海の全てをお主に任せるわけではない。少しでもいい、この美しい海を守る手助けをすればいいんだ。お主一人の力は小さいかもしれないが、お主が動けばきつと誰かが手を貸してくれる。そうやって手助けの輪を広げればいい。大丈夫。お主ならできる。」

うつむいたまま話を聞いていた少女は、何かを決心したかのように勢いよく立ち上がった。

「私、やってみます。」

人魚は嬉しそうに頷いた。日も暮れ始め、人魚が帰ろうと歩き出すと、少女は思い出したように、

「そういうえば、お名前を聞いていませんでしたね。私はナツキです。」

少し照れくさそうに言った。

「私はナギだ。」

人魚は振り返ることなく答え、再び歩き出した。

それから、ナツキは何度もあの場所へ通った。しかし、ナギと会うことは一度もなかった。

さらに月日が流れたある日、いつもとは違う浜辺の騒がしさに、ナギは久しぶりに水面から顔をのぞかせた。すると、子どもから大人までたくさんの人々が、浜辺のゴミ拾いを行っていた。観光客も混じっているようだ。その中に、周りの人にも声を掛けながら、誰よりも一生懸命ゴミを拾うナツキの姿があった。「私には何もできない」と弱音を吐いたナツキはもうどこにもいなかった。「やればできるじゃないか。」

そうつぶやいて、ナギは海の中に帰っていった。

ゴミ拾いを終えた後、ナツキはいつも通りナギと出会ったあの場所へ行った。浜辺に腰を下ろし、しばらくの間美しい海を眺めていた。そろそろ帰ろうと思ったそのとき、足元にキラキラ光るものがたくさん落ちていていることに気付いた。それは、今まで見たこともないようなとても綺麗なウロコだった。ナツキは立ち上がり、「ありがとう、ナギさん。これ宝物にします。」

と大声で海に向かって叫んだ。大切な贈り物をそつと握りしめながら。

【評】一人の少女が人魚とのやりとりを通して成長していく姿が生き生きと表現されています。奄美の美しい海や生き物を守ろうと奮闘する主人公の姿から、世界自然遺産登録を受けた奄美のこれからのことについて読者である私たちも考えさせられる作品です。

(大島北高 講師 今給黎 さくら)

